
チョコレートを買いに

葉琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨコレートを買いに

【Nコード】

N6855T

【作者名】

葉琉

【あらすじ】

『私』が洋筆笥を開くと、扉の向こう側には森が広がっていた。そこからやってきた怪しげな男は、この世界に『ちよこれーと』を買いに来たと言っただが……。

古い洋筆笥を開けると、そこは知らない世界が広がっていた。
いや、冗談でもないんでもなく、真面目な話だ。

古くて安い筆笥で、私が子供の頃からあるそれは、剥がせなかったシールや消せなくてうつすら残ったイタズラ書きで、薄汚れている。

安い割には頑丈だから、どこも壊われていないが、見た目は悪い。
なにより、日焼けして褪せたピンク色だ。

今は、半分物置になっている部屋の隅で、季節モノの服や使っていない小物がしまっている。だから、年に数回しか開けることはないシロモノだ。

そんな何の変哲もない筆笥だったはずなのに、これはどうしたところか。

何故森が広がっているのか。

目がおかしくなったか夢かと思って、扉を閉めて、もう1回開いても、景色は変わらなかった。

どこぞの海外ファンタジーか！

そう叫びたくっても仕方ないと思う。

だって、あまりにも非現実的で、ありえない現象だし。

とりあえず、見なかったことにして、買い物にでも行こう。

うん、その方がいい。最近、仕事が忙しくて疲れているのかもしれないし。

私は、そつと扉を閉めようとした。
が。

「あー、待て！ 閉じるな！」

そんな声が聞こえたと思ったら、閉まりかかったわずかな隙間から、ぬつと何かが飛び出してきた。

……手？ しかも、頑丈そうな皮製の手袋に包まれている。

一瞬呆然として、力が抜けてしまったせいか、勢いよく扉は開き、そこから男が1人、ぬっと現れた。

ありえない容姿の人だった。

見たことのない髪の色と、現代日本ではありえない服。西洋風の鎧なんて初めて見たよ。

これが夢でなければ、なんだというんだ。やっぱり私は疲れているんだ。

だが、目の前の悪夢の産物は、私の顔を見つめながら言葉を発する。

「やっと、繋がったんだ、素人なりに頑張ったんだ、だから閉じないでくれ！」

そんな悲壮な顔で言われても。

「あなたはこの世界の方か？ 少し聞きたいことがあるのだが」

丁寧に見えなくても、驚きのあまり固まっている頭が、うまく言葉の意味を理解できていない。

「いやいや、これ、いったい何がどうなっているの？」

「……ちよこれーと……というものを買いに行きたいのだが、どうすればいいのだろうか」

いかつい男の口から聞こえたその言葉に、私は何を言っているのか、思いつかなかった。

「つまり、異世界から来た人が持っていた『ちよこれーと』食べたさに、異世界への扉を開く中古の魔導装置を修理して、やってきた」と

せまい部屋の中、箆笥の前で私達は向かい合っている。

呆然としていた私に対して、男は自分がここへ来た理由を説明してくれたのだけれど、いろいろぶっ飛びすぎていて、まだ頭がくらくらしていた。

「俺の世界には、異世界から落っこちてくる人が多い。たまたま保

護した『にほん』から来た異世界人が『ちよこれーと』を持っていてな。それがあまりにも美味だったため、忘れられなかったのだ。だから、異世界人から日本語もばっちり習ったし、通貨もなんとか手に入れた。後は『ちよこれーと』を買うだけなんだ！」

そんな力説されてもなあ。

すごい執念だけれど。

「そもそも、あなたの世界にはチョコレートはないの？」

チョコレートをもらったのなら、それを参考に作ればいいのに。

「似たものがあるが、全然味が違う！あの口にいれるとほんのりと広がる甘みと苦み。一度食べたならやめられなくなるあの食感！どれだけ一流の菓子職人が努力しても、同じ味にはならないんだ！」

いや、だから、そんな悲壮な顔して言われても。

私は溜息とともに、話を変えることにした。男からチョコレートに対する熱い思いを聞いていても、空しいだけだ。

それよりも、まず確かめないといけないことがある。

「一応聞くけど、まさかその格好でチョコレートを買いに行こうと？」

鎧はマズイでしょう、鎧は。

それに、そのあり得ない色の髪はどうなの。

空色、なんて、染めましたっていう言い訳が浮くくらい、おかしい。金髪とか赤とかなら、ごまかしようがあったらうに。

「ま、まずいのか？」

男は、私の言葉にもものすごく狼狽えた。

身体はでかくせに、そこまで縮こまることはないと思うけれど。「まずいものにも……コスプレって言うには、ちよっとリアルすぎるし……。あ、もしかして、腰の剣は本物！？」

うっかりしてた！

そんなもの、一般家庭にはないものだ。

「本物、だが。もしかして、それもまずいのか？」

異世界のことを調べたっていうわにりは、リサーチ不足だよ。

彼に日本語を教えたなら、もっと違うことを伝えて欲しかった！
「不審者扱いされると思う」

「そうなのか。それは困ったな。異世界というところがどういうところかわかっていなかったなので、万全を期して武装してきたのだが」
……やはりリサーチ不足だな。

「というか、何か戦うものがここにいると思っただけのこと？」

もしかすると、出る場所は決められなくて、どこに出るかわからなかったのだとしたら、こういうのもありなんだろうか。

しかし、出てくるところを決められないなんて、不便だね。

街中に突然現れたら、大事になっていただろうし。

ちなみに、扉はまだ繋がっている。

扉の向こうは森だ。いつまで繋がっているのかわからないけれど、ここに男1人取り残されても、私が困るし。今は家に私1人だけ
れど、家族が帰ってきたとき、どう説明すればいいっていうんだ。

かといって、こんな格好の男を野放しにすれば大騒ぎになるに決まっている。

「仕方がないな。確か買い置きのチョコレートがあったから、それをあげる」

これも何かの縁だ。早いところ帰ってもらいたいし、買い物に連れていくわけにもいかないしね。

「な、なんと！ それは本当か！」

「うん。だからさっさと帰っ……」

「なんとお優しい方だ」

ぎゃー！

何抱きついているのよ！

それに、鎧が当たっていたいー、なんだかごりごりするー。それに、力も強すぎ……。

「わかった！ わかったから、離して」

そうでないと、潰される……。

青くなつた私が男から解放されたのは、息が止まりそうになって

泡を吹きかけた様子に、男が気が付いたからだった。
気づくの遅すぎだよ。

自分の部屋にあつた買い置きのチョコを持って戻ると、妙にキラキラと目を輝かせた男が待ちかまえていた。

「はい、どうぞ」

それほど高いチョコレートではないけれど、味は美味しいはずだ。男は感動のあまりなのか、わずかに手を奮わせて、チョコレートの包み紙をゆつくりと剥がしていく。

そして、慎重な手つきでそれを口に入れた。

「おおお、これは、何と美味な」

あ、ちよつと目に涙が。

うん、見なかったことにしておこう。

結局、男は渡したチョコレートの全てを食べ終わると満足そうに帰っていった。

たぶん、これで終わり。

あれは夢だったのだと思おうとした。
が。

「……チョコレートを買いたいのだが……できればきちんと方法を教えてもらえないだろうか……」

そう言つて、今度はトイレの扉から現れた男に私は盛大な溜息をついた。

鎧を着けていなかったから、前よりはマシだけれど。

でも、今回はどうしてトイレ？

洋箏筈じゃないのか？

それより、トイレ、行きたいんだけど私はこの場合どうすれば？
いろんな意味で困り果てた私は、曖昧な笑みを浮かべたまま、男

を見つめた。

男も期待に満ちた目で私を見ている。

どうやら、男と私の間に繋がった縁は切れていなかったらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6855t/>

チョコレートを買いに

2011年5月30日21時41分発行